

小学校 道徳

日常生活において、進んで道徳的実践を行う子どもを育てるための
道徳指導の在り方
—保護者とともを考える道徳の時間の授業づくりを通して—

野辺地町立馬門小学校 教諭 齋藤 紀行

要 旨

本研究は、日常生活において進んで道徳的実践を行う子どもを育てるために、道徳の時間の指導計画や授業展開に保護者の意見を取り入れ、協働で行っていくことが有効であることを、道徳の時間の学習の実践を通して明らかにしたものである。この実践を通して、子どもは、教師に促されて行動するのではなく、自ら考え、進んで行動する様子が見られるようになってきた。

キーワード：小学校 道徳 保護者 道徳的実践 思いやり

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説道徳編（平成20年8月）第2章第4節の（3）に、「特に日常生活における道徳的実践を促すためには、学校生活と家庭や地域での生活との関連に着眼することが重要であり、学校と家庭や地域社会との連携を密にし、保護者や地域の人々との共通理解を深め、相互の協力によって道徳教育の充実が図られるようにしていく必要がある」と示されている。

このように、学校における道徳教育は、家庭や地域社会との連携が欠かせない。そして、子どもが道徳的実践力を高め、日常生活でも道徳的実践を行っていくためには、家庭でも学校同様の視点で子どもを見取ることのできる体制を築くことが重要である。

そこで、子どもの実態把握、道徳の時間の計画、授業、授業後の研究協議会、評価、観察に至るまでを家庭や地域の意見を取り入れ、実際の行動に対しても学校、家庭、地域が同じ視点で賞賛したり、認めたりすることで、意欲が高まり、日常生活における道徳的実践につながっていくのではないかと考えた。

II 研究目標

日常生活において進んで道徳的実践を行う子どもを育てるために、道徳の時間の指導計画に保護者などの意見を取り入れ、改善したり、付け加えたりしながら、進めていくことが有効であることを実践を通して明らかにする。

III 研究仮説

道徳の学習において、授業の計画から評価までを、保護者の意見を取り入れ、教師と保護者が同じ視点で賞賛したり認めたりすることで、子どもの道徳的心情・判断力・実践意欲が高まり、日常生活でも道徳的実践を行うことができるだろう。

IV 研究の実際とその考察

1 研究における基本的な考え方

子どもの様子を見ると、道徳の時間では活発に意見交流を行い、価値に迫る発言も多いが、日常の生活場面ではそれが生かされず、道徳的実践に至らないことが度々ある。また、授業で扱った道徳的心情や判断などを意欲的に行動に移そうとする態度もあまり見られない。

これらの原因として、道徳の時間での意見交流が建前論に終始し、子どもの意見に広がりや深まりが生

まれないことが挙げられる。また、授業は授業、生活は生活と、授業と日常生活を切り離して考えている様子も見られるため、両者をつなぐ工夫が必要なのではないかと考えた。

道徳の時間に耕された道徳的心情を基盤に、日常生活のいろいろな場面で判断する機会や、さらには、自分の行為を賞賛されたり認められたりする機会を設けることで、子どもは意欲的になり、日常生活における道徳的实践につながっていくのではないかと考えた。そこで、家庭との連携を強めるために、授業構築のための協議会を数回行い、保護者との共通理解の下に道徳の時間の指導を展開することにした。

2 研究内容

(1) 本時の指導までの工夫

道徳の時間では、「思いやり」の内容項目について、保護者と協同して授業を実践することにした。これは、本校の道徳教育の重点事項でもあり、保護者を対象としたアンケートでも、内容項目の中で最も重要であるという回答を得たものである。本時までの協議会では、内容項目についての共通理解を図るとともに、具体的な目標や、資料の選択と扱い方、本時の指導での保護者と子どもとのかかわり方について協議を重ね、指導計画を立てた。

(2) 本時の指導における工夫

本時の授業では、保護者に参加してもらい、グループでの話し合いを進めるとともに、子どもと一緒に考え、話し合い、聞き合う役目を果たしてもらった。また、話し合いの場面では、日常目にする子どもの様子や行動などの具体例を挙げてもらうことで、子どもが自分の生活を振り返り、本時の中心価値と関連させて、具体的に考えることができるのではないかと考えた。さらに、子どもと教師との交換日記の中から、内容項目にかかわると思われる部分を教師が指摘することで、自分の体験を振り返らせるようにした。

(3) 授業後の工夫

道徳の時間で学習したことを、授業と生活を切り離すことなく日常生活でも考えていけるようにするため、本時の指導後には、保護者にいつも以上に子どもを見ること、そして、「困っている友達には声をかける」「相手の立場や考えを自分に置き換えて考え、行動する」などの観点を例示して、道徳的实践が見られたときには賞賛したり、しようとしているときには励ましたりしてもらうことをお願いした。

3 検証計画

(1) 本時の指導での検証

本時では、授業の最初と最後で同じ発問（「思いやりとはどんなことか」）をし、授業を通して子ども自身の意見に広がりや深まりが出たかどうか、具体的に考えることができるようになったかなどについて評価する。

(2) 授業後の検証

授業後には、子どもと保護者に対して、「授業を通しての変容」について、「道徳的心情」「判断力」「意欲」「態度」「実践」「日常の意識」などの観点をアンケート調査を行う。併せて、子どもの自由記述により、「思いやり」についての考えや行動がどのように変化したかを見る。

また、授業の3週間後には、授業で学んだことを実践できているかについてアンケート調査を行い、子ども自身、保護者、担任以外の教師に評価してもらう。

4 授業の実際

(1) 本時のねらい

主人公が、葛藤しながらもなぜ思いやりある行動がとれたのかを保護者と一緒に話し合うことで、思いやりを形で表していくためには相手の立場に立って考えたり、行動したりすることが必要だと気付くことができる。

(2) 本時の展開

	学 習 活 動	支援と指導上の留意点
導 入	1 「よちよち歩きの女の子が倒れたときどうするか」、 「電車の自分の前に疲れ切った女の子が立っていたらどうするか」について考え、理由とともに話す。	・女の子が倒れたら、起こしてやるのが当たり前で、

<p>導 入</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・声をかける。 ・倒れた女の子を起こす。 ・疲れた少女に席を譲る。 <p>(理由)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それが当たり前行動だから。 ・思いやりだから。 ・困っていた人を助けるのは当たり前だから。 <p>2 思いやりとはどんなことかを考えて発表する。</p>	<p>思いやりある行動と確認する。</p> <p>*評価</p>
<p>展 開</p>	<p>3 資料『ほっといて』を読んで考える。</p> <p>①場面や登場人物の立場などを確認する。</p> <p>「女の子が倒れたら起こす」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さん…「ほっといて」怒る ・女の子…泣く ・私…嫌な顔，腹立たしさとはずかしさ <p>「疲れた少女に席を譲る」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さん…「ありがとう」助かった ・女の子…にっこり ・私…笑顔，何となくすっきり <p>②思いやりある行動をした私が最初はいやな顔をして次は良い顔になったのはなぜか，思いやりある行動に何が必要なのかを考えて話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お母さんの言い方が悪い。 <p>→受ける方の言動も大切。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前者の私は，何も考えていない。 ・後者の私は，みんなを見て，考えている。 ・お母さんに一言声をかければ良かった。 <hr/> <p>4 思いやりとはどんなことか，授業を通して改めて考えたことなどをノートに書いて発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手のことをよく考えて行動すること。 ・相手の立場になって行動すること。 ・ちょっぴり勇気のいる行動。 	<ul style="list-style-type: none"> ・考えさせる前に，なぜ，お母さんは「ほっといて」ほしかったのかを確かめる。 ・自分の考えを書かせる。その後，4人グループ+保護者が入って意見交換し，互いの意見の共通点を探す。 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ・書いて発表 ・保護者にも感想を発表してもらう。 <p>*評価</p>
<p>終 末</p>	<p>5 自分自身の行動を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・友達が腕を骨折したとき，大変だろうなと思い，仕事を代わった。ありがとうと言われうれしくなった。 ・お母さんが風邪を引いて寝込んでいるとき，早く良くなってほしくて，御飯を作ってあげた。 <p>6 保護者の感想を聞く。</p> <p>7 「ヘブンズパスポート」を配布し，紹介する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○思いやりをした…金色シール ○思いやりをされた…銀色シール 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の行動から想起できない子どものために，交換日記から，ふさわしいエピソードを用意しておく。 ・行動だけでなく，その時の気持ちも聞く。 ・子どもにされた思いやりある行動を保護者に紹介してもらう。

*評価

思いやりある行動をするためには，相手の立場や思いを考えることが必要だと気付くことができたか。

5 考察

(1) 道徳的心情の高まり

「思いやり」に対する自分の考え方が、授業を通してどのように変容したかを見た。授業の最初と最後で「思いやりとはどんなことか」と同じ発問をしたところ、全員が新しい意見を加えていた。授業前半では漠然としていた「思いやり」の意識に「相手意識」や「心地よさ」などが加わり、より具体的になったといえる。

これらのことから、本授業を通して、子どもは自分のもっている意見が広がり、それまで考えていたものとは違う要素が加わり、道徳的心情が高まったことになるのではないかと考えられる。

次に、子ども自身は、保護者と一緒に考えたことで、「思いやり」についてどの程度考えられたのか、考察した。

図1を見ると、授業を通して、92%の子どもが「思いやり」について考えられたということが分かる。その理由として以下のようなことが挙げられた。

主な理由

- 家の人と考え、いろいろな意見が出た。
- 家の人と考え、なるほどと思った。
- 違う意見が出て、たくさん考えられた。
- 例を出してくれて分かりやすかった。

これを見ると、保護者とともに考え、話し合ったり聞き合ったりすることで、子ども同士だけの時よりもいろいろな考えをもてるようになったことが分かる。

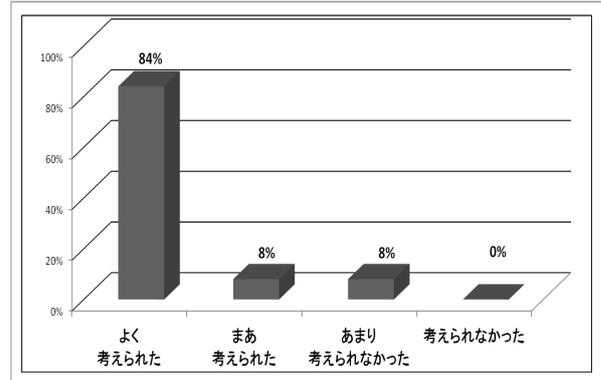


図1 授業を通して「思いやり」を考えられたか

(2) 道徳的判断力

授業後すぐに子どもに対して行ったアンケート調査の結果を見ると、今後思いやりある行動が求められるとき、自分で判断できそうだと全員が答えていた。実際の場面で判断できるかどうか、今後継続して見ていく必要がある。

(3) 道徳的实践意欲

① 日常で道徳的实践をしたくなったか。

小学校学習指導要領解説道徳編（平成20年8月）には、道徳的实践意欲について、「道徳的实践意欲と態度は、道徳的心情や道徳的判断力によって価値があるとされた行動をとろうとする傾向性を意味する。道徳的实践意欲は、道徳的心情や道徳的判断力を基盤とし道徳的価値を実現しようとする意志の働きであり、道徳的態度は、それらに裏付けられた具体的な道徳的行為への身構えということが出来る」と記されている。

したがって、ここでいう「道徳的实践意欲」とは、道徳的な行為をしようとするかどうか、したいかどうかということとしてとらえ、その視点で判断していくことにした。

まず、授業を通して、日常でも道徳的实践をしたくなったかを聞いた。（図2）

主な理由

- みんな笑顔になるから。
- 少し難しそうだけど、できそう。
- 大切さを理解した。是非、やりたい。
- みんなうれしくなり、いい気分になれるから。
- ありがとうを言われたい。低学年のよき手本になりたい。

この結果を見ると、92%の子どもが「実践したい」と考えていることが分かる。その理由を見ると、「みんなのため」「低学年のよき手本になりたい」など、相手意識をもってきたということが分かる。

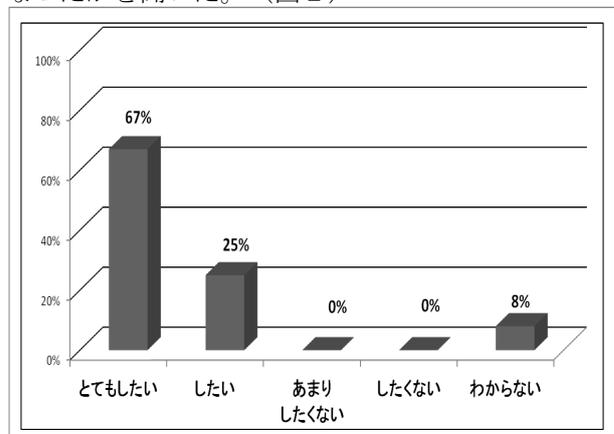


図2 実践したくなったか

② 「思いやり」について考えなくなったか。

次に、日常でも「思いやり」について考えなくなったかを聞いた。（図3）

主な理由

- まだ分からないことがあるから考えたい。
- 考えることでもっと良いイメージをもちたい。
- 家の人となら考えが深まるから。
- 今回の学習では心がすっきりした。もっと知りたいし、もっと心がすっきりしたい。

これを見ると、授業を終えた直後には、日常でも考えたいと感じていることが分かる。また、その理由を見ると、もっと知りたい、もっと深く考えたいという意欲をもっている様子が分かる。

(4) 道徳的实践

授業を終えた3週間後、実際に行動に移しているのか追跡調査を行った。

図4を見ると、92%の子どもが授業を通して行動できるようになったと答えている。なお、この92%の子どもは、授業後に聞いた「授業を通し日常でも実践をしたくなったか」(図2)で、「とてもしたい」「したい」と答えている。8%の子どもは「授業にかかわらずできている」と答えている。

図5を見ると、83%の子どもが授業を通して日常でも考えるようになったと答えている。授業後に、「日常でも考えられるか分からない」と答えていた子どもは、「あまり考えない」ようになった。

これらのことから、授業を通して、日常でも「実践したい」「考えたい」と感じる子どもができた子どもほど、授業後もその意欲が続き、実践にも至っているということがいえる。つまり、授業後の道徳的实践につなげるためには、授業で「考えたい」「実践したい」と感じさせることが重要といえるのではないだろうか。

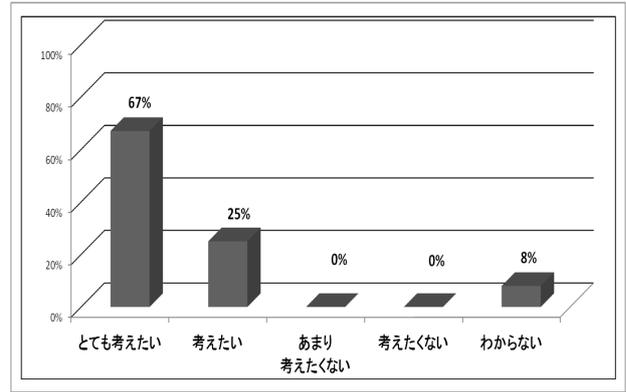


図3 授業を通し日常でも考えなくなったか

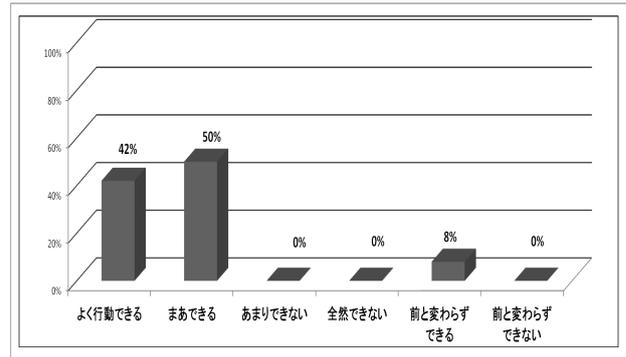


図4 行動できているか

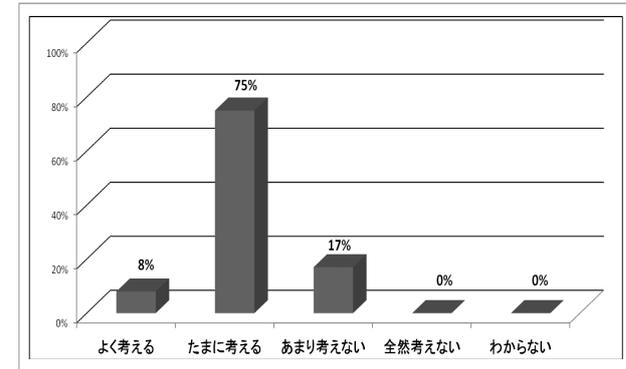


図5 日常でも考えているか

表1 授業後に見られた「思いやりある行動」の具体例

	【子どもの自己・相互評価, 教師評価】
学校において	<ul style="list-style-type: none"> ○係活動など、何かを忘れていた友達に教える。 ○校外学習を欠席する子どものために、全員が話し合い、手紙を書き、お守りを買うことを決めた。 ○友達を遊びに誘うようになった。 ○あいさつや受け答えが良い。反応が速い。 ○枯れ葉集めなど用務員の仕事を進んで手伝う。 ○保健室で休んでいる友達に「大丈夫?」と声をかけることができた。
家庭において	<ul style="list-style-type: none"> ○さっと手伝えるようになった。 ○しかつても嫌な顔をしなくなる。不平不満が少なくなる。 ○頼み事をすると、「あと何かない?」と聞くようになった。 ○以前は兄弟間で言い争いが多かったが、話し合って解決できるようになった。 ○近所の人にもあいさつができるようになった。

(5) 保護者の変容

1回目の協議会では、保護者は親としてのこれまでの自分の姿を反省する内容が多く、そのことからこの協議会、研究の必要性を見いだしているようであった。それが2回目になると、ほめることの重要性に気付き、積極的に子どもにかかわろうとする意見が出されるようになってきた。中には、道徳教育の本質にかかわるような発言をする保護者も見られた。また、保護者に、家庭でも道徳の時間の学習について子どもと話すようになったのかを聞いてみたところ、授業・協議会を通して、保護者は道徳の時間の学習について、子どもと話すようになったことが分かる。(図6)

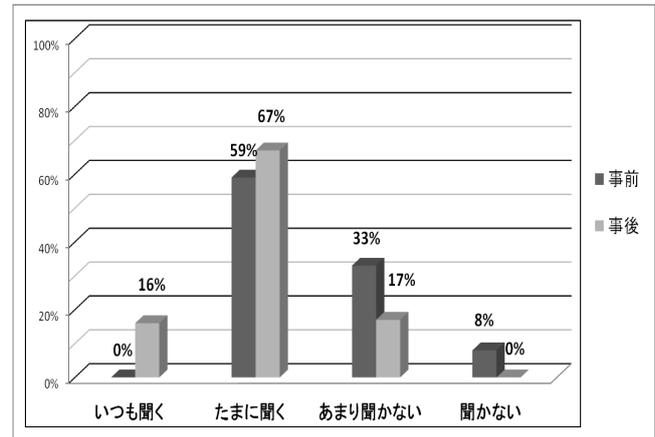


図6 子どもに道徳の時間の学習内容を聞いているか (事前と事後)

V 研究のまとめ

道徳の時間の授業を通して、子どもには、以下のような変容があった。

- ・保護者とともに考え、話し合うことを通して、価値についていろいろな考えをもてるようになり、自分の意見に広がりや深まりが見られた。また、実践への意欲が向上した。
- ・本授業で考えた「思いやり」の内容項目について、自分の行為としてだけでなく、相手意識をもってとらえることができた。
- ・日常でも「実践したい」「考えたい」と答えた子どもは、実践も継続化するようになった。

これらのことから、本授業で考えた「思いやり」の内容項目が、子どもにとって実感を伴ったものになったといえる。

一方、保護者にも、ほめることの重要性や直接的なかわりの大切さに気付き、子どもに話を聞くようになるなどの変容があった。

このように、保護者とともに道徳の時間の授業づくりを行ってきたことで、子どもは、道徳的価値について考える機会が以前より多くなった。また、教師に促されてから行動するのではなく、日常生活でも進んで道徳的実践をしようとする姿が見られるようになってきた。

VI 本研究における課題

「授業内容についてあまり考えられなかった」と答えた子どもは、「日常でも実践したいか分からない」「日常でも考えたいか分からない」と答え、実際に日常生活でも考えている様子は見られなかった。また、日常生活における道徳的実践にもあまりつながっていないように感じられた。逆に、「よく考えることができた」と答えている子どもは実践も継続化した。これらのことから、道徳の時間の授業を要として、子どもに実感を伴う道徳教育を展開していく必要があるといえる。また、今回の実践を通して、保護者も以前に比べ、子どもに学校での出来事や道徳の時間の学習内容などについての話を聞くようになった。子どもが自ら考え、継続して実践していくためには、このような保護者の意図的な声かけや賞賛が欠かせない。子どもが今後も引き続き道徳的心情を道徳的実践へつなげていくために、家庭だけでなく地域とも連携して子どもを見取る体制を築く方策について検討したい。

<引用文献>

文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 道徳編(平成20年8月)』, p. 28, p. 33